

# 聚楽第周辺の金箔瓦

— 聚楽第城下町復原に向けて —

森島康雄

## 1. はじめに

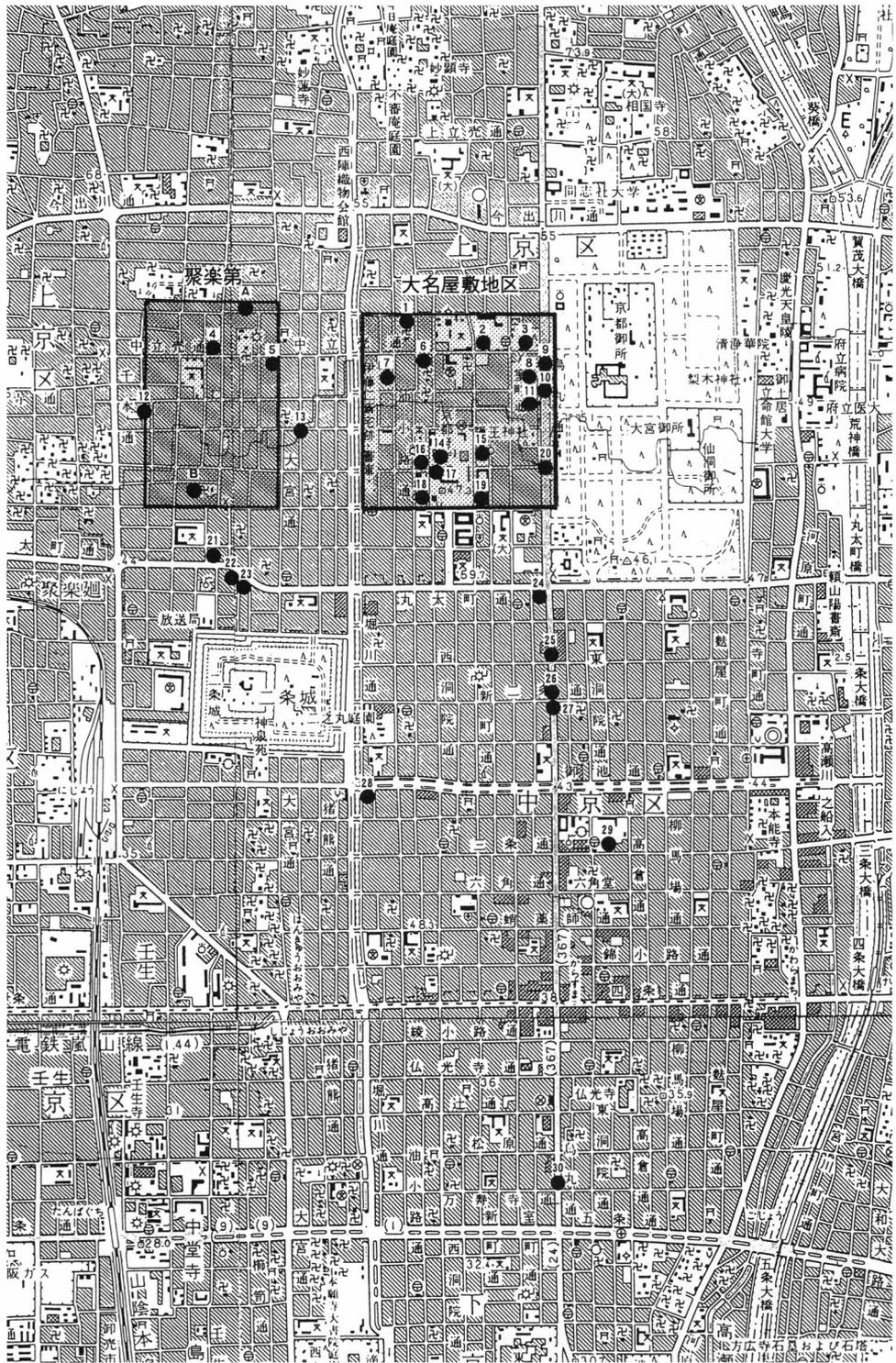
近年、織豊期城郭研究会で瓦をテーマとする研究会が開かれるなど、当該期の瓦の研究は全国的に盛んに行われるようになってきている。その中で、天下人の城と城下町が存在し、多量の金箔瓦が出土している京都と大阪は、その資料の多さのために、かえって資料の整理が十分に行われなままになっている。しかしながら、両地域の瓦の研究が、当該期の瓦の研究を進めるうえで不可欠であることはいうまでもない。

本稿では、京都市上京区南部を中心に分布する金箔瓦を取り上げ、その分布を明らかにするとともに、軒平瓦の分類、軒平瓦と軒丸瓦の組み合わせの検討にも取り組み、聚楽第城下町の復元にわずかでも迫りたいと思う。ここで、金箔瓦を取り上げるのは、これまでの調査成果から、この地域に存在したと考えられる聚楽第と城下町の建物に使用されていた装飾的要素をもった瓦(軒丸瓦、軒平瓦、鬘斗瓦・棟込め瓦・鬼板瓦などの棟飾り瓦)は基本的に金箔瓦であったと考えられることと、京都は、平安京以来連続と瓦が使用され続けた地域であり、金箔の有無が、型式だけでは決定することの難しい瓦の使用時期を特定する有力な根拠となることなどによる。したがって、金箔の残っていない個体についても、金箔瓦と同範もしくは同文であるものは取り上げた。

## 2. 金箔瓦の分布

京都市上京区の南部で金箔瓦が出土することは古くから知られている。この地域における金箔瓦の報告は、1950年の「京都市警庁舎敷地遺跡調査報告」<sup>(註1)</sup>にさかのぼる。しかし、金箔瓦が注目されたのは、1970年代に行われた京都市営地下鉄烏丸線建設に伴う発掘調査で、五葉木瓜文軒丸瓦などが発見されてからである。当時、織田信長の旧二条城に関連するものと考えられていたこれらの瓦は、後述のように、聚楽第城下町に関連するものであることが確実になっている。

これまでに、聚楽第周辺の金箔瓦の分布を示したのものとしては、1990年の「第35回京都市考古資料館文化財講座資料」<sup>(註2)</sup>があるが、それまでに、報告されていた20地点のうち、わ



第1図 金箔瓦出土地点分布図(1/25,000)

ずか3地点に、未報告の5例と採集資料1例を加えただけの、極めて不完全なものであった。

聚楽第周辺で金箔瓦が出土している地点は管見で30地点に及ぶ<sup>(注3)</sup>(第1図・付表)。その分布は北は一条通、南は下立売通、東は烏丸通、西は堀川通の間に集中している。この範囲には京都府庁などの公的施設が多く、比較的広い面積の発掘調査が行われる機会が多いという事情はあるものの、1地点からの出土量が100点を越える例が多い。この範囲をはずれた分布地点のうち、1地点で10点を越える例は、聚楽第東堀と推定される大宮通中立売下水和水町(No. 5地点)のみであることと比較しても、この地域に突出した分布を示していることが明らかである。

一方、大宮通以西の聚楽第内の可能性の高い地域からは東堀No. 5地点を含めても3地点しか確認されていない。これは、東堀が、多量の金箔瓦を含んだ土で、聚楽第の内側から埋められていることと関係していると考えられる。すなわち、聚楽第内部は築城時に堀を掘った土で盛土整地されていたが、廃城時には、堀を埋めるためにこの盛土が使われたことが推定できるのである。

丸太町通より南の地点は、1地点の出土点数が数点で、出土状況の判明しているものには、江戸時代の整地層からの出土もあることから、金箔瓦の本来の分布圏を離れたものと言ってよい。

それでは、前述の金箔瓦の分布が集中する範囲にはどのような意味があるのだろうか。

聚楽第そのものの範囲は未だ不確定な部分が多い。東堀は前述のNo. 5地点で幅15m以上、深さ8.4mの堀が確認されているので、大宮通付近とみられる。北堀の可能性のある遺構としては、一条通智恵光院東入ル鏡石町(第1図A地点)において、北に落ちる肩が検出されている<sup>(注4)</sup>。この地点の北側には、現在も東西方向の石垣が存在する。この石垣をただちに聚楽第の遺構とすることはできないが、石垣の南と北では約3mの比高差が現存し、現段階では一条通のやや北側が北堀の有力な候補地であると考えられる。南堀は智恵光院通出水下分銅町にある松竹寺一帯に存在する低地(第1図B地点)が、その痕跡と考えられており、下立売通のやや北側が想定される。西堀については有力な候補地がないが、土屋町通の中立売通から南にみられる低地がある<sup>(注5)</sup>いはその痕跡であるかも知れない。

各堀ともに一直線ではなかったであろうが、ここで重要なことは、北堀が一条通付近、南堀が下立売通付近に想定されることである。これは、先に見た金箔瓦の分布が集中する範囲の南北の幅に一致する。聚楽第の真東に金箔瓦を葺いた大名屋敷が配置されたと考えることができる。

付表 聚楽第跡周辺の金箔瓦出土地点一覧表

番号	地点名	軒丸	軒平	飾り	家紋瓦の種類／備考	文献
1	上京区小川通一条下ル小川町	◎	×	◎	梅鉢文軒丸瓦・飾り瓦、桐文飾り瓦	22
2	上京区一条通室町西入ル東日野殿町	◎	◎	◎	桐文軒丸瓦・軒平瓦・飾り瓦、五葉木瓜文飾り瓦他／未報告	21
3	上京区烏丸通中立売上ル龍前町	○	◎	◎	扇に月丸文軒平瓦・飾り瓦、桐文飾り瓦	16
4	上京区中立売通智恵光院西入ル多聞町	○	×	◎	桐文飾り瓦	5
5	上京区大宮通中立売下ル和水町	◎	◎	◎	宝輪文軒丸瓦、桐文軒平瓦(滴水瓦)・飾り瓦他／聚楽第東堀	24
6	上京区中立売通小川東入ル三丁町	◎	○	◎	梅鉢文軒丸瓦・飾り瓦、三ツ葉葵文軒丸瓦、桐文飾り瓦	12
7	上京区中立売通油小路下ル甲斐守町	-	-	-	／未報告	21
8	上京区烏丸通上長者町上ル龍前町他	◎	◎	◎	五葉木瓜文軒丸瓦・飾り瓦、桐文軒丸瓦・軒平瓦・飾り瓦他	8
9	上京区烏丸通中立売下ル龍前町・御苑町	◎	×	○	五葉木瓜文軒丸瓦・飾り瓦	3・7
10	上京区烏丸通上長者町・御苑町	○	×	×		7
11	上京区烏丸通上長者町下ル龍前町他	◎	-	-	五葉木瓜文軒丸瓦	14
12	上京区土屋町通上長者町下ル山王町	◎	×	×	桐文軒丸瓦	10
13	上京区下長者町黒門通	×	◎	×	橘文軒平瓦(滴水瓦)	2・13
14	上京区下立売通新町西入ル藪之内町	○	×	○		23
15	上京区新町通出下長者町下ル両御霊町	◎	×	○	三ツ葉葵文軒丸瓦	4
16	上京区小川通出水上ル丁字風呂町	-	-	-	／未報告	21
17	上京区下立売通新町西入ル藪之内町	○	○	◎	桐文飾り瓦	19
18	上京区西洞院通下立売上ル西大路町	◎	◎	◎	桐文軒丸瓦・軒平瓦・飾り瓦	26
19	上京区衣棚通下立売上ル常泉院町	◎	○	◎	桐文軒丸瓦、違い鷹羽文飾り瓦	1・25
20	上京区烏丸通出水御苑町・桜鶴円町	○	○	×		11
21	上京区日暮通丸太町上ル西入ル西院町	×	○	×	／未報告	15・21
22	上京区智恵光院通丸太町下ル主税町	○	○	×		6
23	上京区日暮通丸太町南伊勢屋町	◎	◎	×	橘文軒丸瓦・軒平瓦(滴水瓦)	9・20
24	上京区烏丸通丸太町下ル大倉町	-	-	-	／客土から出土	27
25	中京区烏丸通夷川上ル少将井町	×	×	○		11
26	中京区烏丸通二条上ル蒔絵屋町	×	×	○		7
27	中京区烏丸通二条下ル秋野野町	-	-	-	／瓦の種類記載なし	7
28	中京区堀川御池東入ル森ノ木町	-	-	◎	桐文飾り瓦／未報告	18・21
29	中京区三条通東洞院東入ル曇華院前ノ町	×	◎	×	桐文軒平瓦	17
30	下京区烏丸通万寿寺上ル五条烏丸町・御供石町	◎	×	×	桔梗文?軒丸瓦／江戸時代の層から出土	11

(番号は第1図および本文中の地点番号に対応する。)

文献の番号は、文末の出土金箔瓦記載文献の番号に対応する。

◎は家紋瓦が含まれることを示す。)

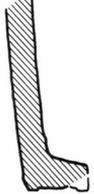
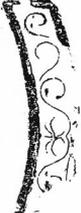
### 3. 軒平瓦の分類(第2図～第5図)

筆者は先に、聚楽第東堀出土の軒平瓦の分類を行ったが<sup>(注6)</sup>、聚楽第周辺に分布する金箔瓦をこれに加えて型式分類することで、聚楽第と城下町の瓦の共通点・相異点などが整理されると考えられる。

ここでは、前稿で型式分類を行った1～42類に加える形で城下町出土の瓦の分類を行うが、前稿の若干の補足も併せて行いたい。分類の対象となるのは前稿と同様に、中心飾りおよび脇飾りのほぼ全容が判明するものである。

まず、39類とした、宝珠を中心飾りとし瓦当の左半分に水波文を持つ瓦は、右半分に子葉と3反転する唐草を配するものであることが、大坂城跡の資料から判明した。また、聚楽第報告で、163・164・168とした瓦が、同範であることが新たに判明し、43類とした。これは、大坂城跡<sup>(注9)</sup>、姫路市心光寺<sup>(注10)</sup>に類例があるが、これらが、脇飾りの唐草を4反転もしくは3反転させるのに対して、43類は2反転である。これらが同範であるとする、大坂城、心光寺、聚楽第の順に範の両端を切り縮めていったものと考えられ、また、範を切り縮めたと考えると文様区の両端に唐草が接する文様構成が理解しやすい。いずれにせよ、これは姫路系瓦工の典型的な文様である<sup>(注11)</sup>。

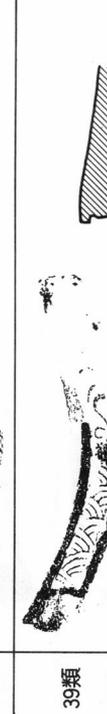
44類は五葉の中心飾りに大きく巻き込む3反転の唐草の脇飾りを持つものである。3類と同範の可能性があるが、重なる部分が少なく断定できないため、別分類としておく。No.18地点から出土している。45類としたものは、5類に類似した五葉の中心飾りに、2反転する唐草を配したものであるが、中心飾りが大きく開くところが異なっている。No.22地点から出土した。46類は三葉の中心飾りに3反転する唐草を配したものである。No.18地点から出土している。47類は三葉の中心飾りに2反転の唐草の脇飾りを持つものである。No.19地点から出土した。48類は47類と同じ文様構成であるが、唐草も長く伸び、大振りの瓦である。No.6地点からまとまって出土している。49類としたものは、43類と同系統の文様構成である。No.8地点から出土している。50類は三葉の中心飾りと長く伸びた1反転の唐草の脇飾りを持つ。No.18地点から出土した。51類は桐花状の中心飾りに2反転する唐草の脇飾りを持つものである。瓦当の高さが高い、大振りの瓦である。No.19地点からまとまって出土した。52・53類は桐葉文の中心飾りに1反転する唐草を配するものである。唐草は42類と同様に幅広で中心が溝状に窪んでいるためにレリーフ状になっている。52類はNo.8地点からまとまって出土し、53類はNo.29地点で出土している。54類は重弧文を中心飾りとし、2反転するレリーフ状の唐草を持つ。中心飾りが瓦当下部に矮小化し、唐草の1反転目が大きく中央に向かって巻き込んでいる。瓦当面の下辺が上辺に平行せず垂れ下がるため、瓦当の高さが中央部で高くなっている。大坂城跡・伏見<sup>(注12)</sup>

1類			9類		
2類			10類		
3類			11類		
4類			12類		
5類			13類		
6類			14類		
7類			15類		
8類			16類		

第2図 軒平瓦分類図(1) 1/6

17類			25類		
18類			26類		
19類			27類		
20類			28類		
21類			29類		
22類			30類		
23類			31類		
24類			32類		

第3図 軒平瓦分類図(2) 1/6

33類		41類	
34類		42類	
35類		43類	
36類		44類	
37類		45類	
38類		46類	
39類		47類	
40類		48類	

第4図 軒平瓦分類図(3) 1/6

軒平瓦分類図一注

1. この分類図は、文様構成による型式分類である。したがって、同  
 範瓦によって文様を復原することが可能なものについては、複数個体  
 の合成によって、できるだけ文様構成がわかるようにしている。なお、  
 対象とした資料は聚楽浄周辺のものに限ったが、39類のみは良好な資  
 料に恵まれなかったため、本文中でも触れた大坂城跡の資料を用いた。

2. 各分類の軒平瓦のうち、報告書などで公表されているものを、以  
 下に挙げる。

1類；文献24-61・62。2類；文献24-63。3類；文献24-64。4類；文  
 献8-NH46、文献24-65、文献26-1031・1032。5類；文献24-66。6類；  
 文献24-67。7類；文献24-68。8類；文献24-70。9類；文献24-69。10  
 類；文献24-72。11類；文献24-71・73・74。12類；文献24-75~77。13  
 類；文献24-78。14類；文献24-79・80。15類；文献24-81。16類；文献24-  
 24-82~84。17類；文献24-85。18類；文献24-86・87。19類；文献24-  
 88。20類；文献24-89。21類；文献24-90・91。22類；文献8-NH51、文  
 献24-92~96。23類；文献24-97。24類；文献24-98~101。25類；文献  
 24-102。26類；文献24-103~105。27類；文献24-106。28類；文献24-  
 107~111。29類；文献8-NH47、文献24-112~116。30類；文献24-117~  
 120。31類；文献24-121~124。32類；文献24-125・126。33類；文献  
 24-127~129。34類；文献24-130。35類；文献24-131・132。36類；文  
 献24-133~136。37類；文献24-137・138。38類；文献24-139。39類；  
 文献24-140。40類；文献24-172。41類；文献24-141。42類；文献24-  
 142。43類；文献24-163・164・168。44類；文献26-1030。45類；文献  
 6-図6-2。46類；文献26-1028。47類；文献25-49・50。48類；文献  
 12-第18図-1~12。49類；文献8-NH45。50類；文献26-1024。51類；文  
 献25-45~48・58。52類；文献8-NH44。53類；文献17-第69図-7。54  
 類；文献25-63。55類；文献20-資料1-3。

3. 断面図は瓦当面を垂直に配置した。縮尺は1/6である。

49類	
50類	
51類	
52類	
53類	
54類	
55類	

第5図 軒平瓦分類図(4) 1/6

城跡に類例があり、中村博司氏が軒平瓦第Ⅱ類<sup>(注14)</sup>としているものである。No. 19地点から出土した。55類は橘文を配する滴水瓦である。No. 23地点で採集された。No. 13地点でも類例がまとまって採集されているが、同範ではないようである。<sup>(注15)</sup>

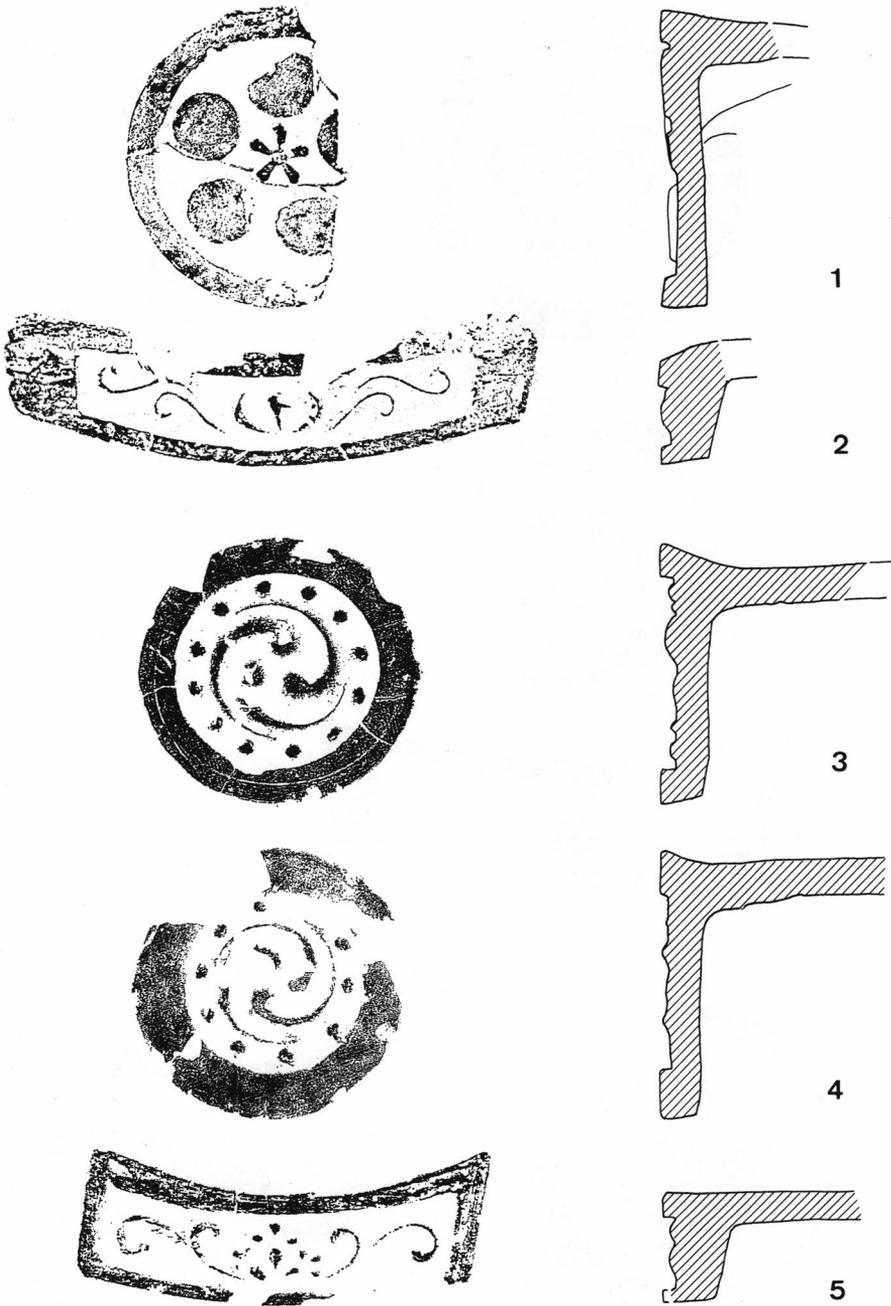
#### 4. 瓦の組み合わせ

前項で分類した軒平瓦のうち、同時に使われた軒丸瓦などとの組み合わせが判明する例を検討してみる。

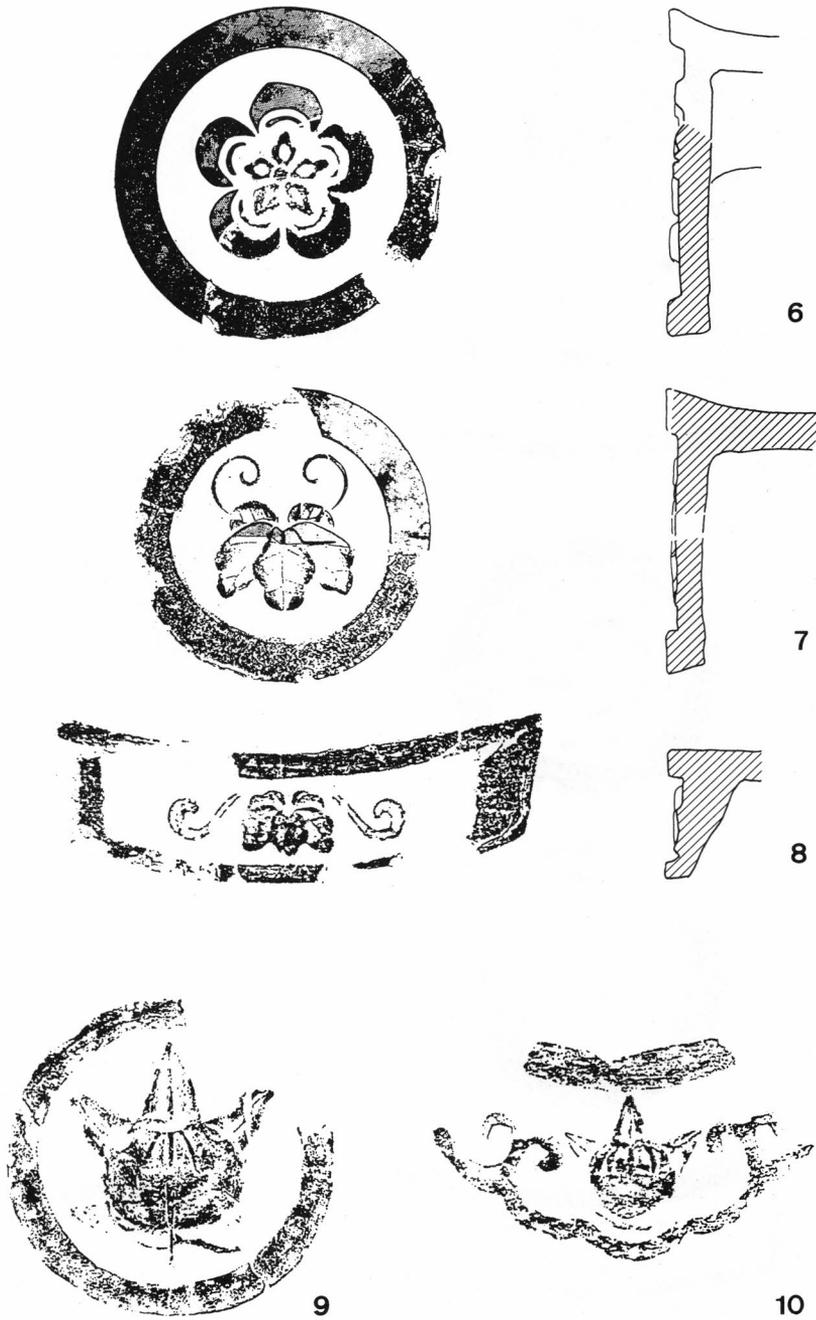
48類と組み合わせるのは梅鉢文軒丸瓦(第6図-1)である。この両者と梅鉢文方形飾り瓦が、No. 7地点(上京区中立売通小川東入ル)で出土した30点の金箔瓦の大半を占める。近接するNo. 1地点でも異範の梅鉢文軒丸瓦・飾り瓦が少量ではあるが出土している。これらの瓦はこの付近に存在した大名屋敷に葺かれていたものと考えられる。梅鉢文を用いる大名には前田利家があり、筆者はNo. 7地点付近に前田家の屋敷を想定している。<sup>(注16)</sup>なお、両地点では桐文飾り瓦も出土しており、これも、ここで使用されていたものと思われる。

51類はNo. 19地点(上京区衣棚通下立売上ル常泉院町)の土坑62で軒丸瓦と共伴している。<sup>(注17)</sup>共伴する軒丸瓦のうち型的にまとまりのあるものは3型式認められ、すべて左巻きの巴文である。珠文の数が12個(第6図-3)・10個(同4)のものと珠文を持たないものがある。珠文の数が、12・10個のものは、珠文の金箔が省略されていることや、調整技法もほぼ同様である。この土坑では47類も共伴しているが、個体数から考えて、51類と組み合わせるのは3種類の軒丸瓦のうち珠文を持つ2者である可能性が高い。これらのうち、丸瓦部内面のコビキ痕跡を観察できるものはすべてコビキBである。

52類はNo. 8地点(上京区烏丸通上長者町上ル龍前町他)で1978年に行われた発掘調査においてまとまって出土している。報告書ではここで出土した金箔瓦を「木瓜文・桐文を飾る大型優品のものと、一回り小さく巴文・唐草文を飾るもの」に分け、前者を、同範例が多いこと、前者の組み合わせのみを出土する遺構があることなどからセットとして把握している。これらは、五葉木瓜文軒丸瓦(第7図-6)<sup>(注18)</sup>15点、五葉木瓜文棟込め瓦<sup>(注19)</sup>8点、桐文軒丸瓦(同7)<sup>(注20)</sup>4点、桐文軒平瓦(52類;同8)10点である。一方、後者は、ほとんど1点づつでセット関係を把握することはできないとされている。このセット関係の認識に異論はない。しかし、報告書における両者の先後関係の認定は誤りと言わなければならない。報告書では前者を旧二条城の瓦、後者を聚楽第城下町の瓦とみているが、前者のうちコビキ痕跡を観察できるものはすべてコビキBである。コビキB技法が採用されるのが聚楽第築城以後であることは、聚楽第東堀の調査で判明している。また、後者のうち、NH46とNH47<sup>(注21)</sup>は東堀で出土した軒平瓦4類・27類とそれぞれ同範である。したがって、前者の方が、



第6図 軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせ(1)



第7図 軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせ(2)

新しい様相を示していることは明らかである。

ともあれ、報告書も指摘しているとおおり、52類に組み合わせるのは五葉木瓜文軒丸瓦か桐文軒丸瓦に絞られる。瓦当文様の統一性を重視すれば桐文軒丸瓦となろうが、ここでは、SG08で、52類と五葉木瓜文軒丸瓦・飾り瓦が共伴するが、桐文軒丸瓦は共伴していないことや出土個体数を重視して、五葉木瓜文軒丸瓦と組み合わせ可能性も考えておく。筆者は、これを、この場所にあった織田信雄邸の主要な建物に使用されたものと考えている。<sup>(注22)</sup>なお、ここで出土した五葉木瓜文軒丸瓦と同文の瓦は近接するNo. 9・11地点で、五葉木瓜文棟込め瓦と同文の瓦はNo. 2・9・19地点でも出土している。

55類は発掘調査による出土遺物ではないが、ほぼ完形の橋文軒丸瓦(同9)とそろって採集されており、両者が組み合わせるものとみて大過なからう。この軒丸瓦のコビキ痕跡は不明であるが、滴水瓦は文禄・慶長の役に参戦した大名たちによって日本にもたらされたものとされており、<sup>(注23)</sup>これと組み合わせる軒丸瓦はコビキB技法によるとみて間違いない。

以上の検討によって明かなことは、聚楽第城下町において軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせが判明するものは、いずれも丸瓦部内面にみられるコビキ痕跡がコビキBであるということである。また、軒平瓦はすべて瓦当の高さが約6cmを越える大振りなものである。これは、レリーフ状の唐草と同様に、金箔で飾った瓦当をより目立たせることを意図したものであり、瓦当笠製作時から金箔瓦となることを予定して作られたといえることができるだろう。このような瓦は聚楽第築城時の瓦にはみられない。

すなわち、これらの組み合わせは、聚楽第築城時よりも新しい様相を示しているのである。多くの発掘調査によって得られる資料の中で、聚楽第築城時にさかのぼり得る瓦の組み合わせが発見されていないことは、聚楽第築城時の瓦の組み合わせを保ち得ない事情があったことを示していると考えられよう。

## 5. まとめ

本稿では、まず金箔瓦の分布状況を明かにし、聚楽第の真東の区域に大名屋敷が配置されたことを指摘した。次いで、軒平瓦の分類を行ったが、この作業は、聚楽第ばかりでなく、他の織豊期城郭における同範・同文瓦の追求から瓦工人の編成などに迫るためにも重要な基礎的作業と考えている。さらに、軒平瓦と軒丸瓦との組み合わせの検討から、組み合わせの把握できるものが、すべて聚楽第築城時よりも新しい様相であり、聚楽第築城時の様相は保たれていないことを明かにした。

聚楽第周辺の広い範囲で築城時の様相を保ち得ない事情とは、京中で戦が起こったかのような騒ぎになったという豊臣秀吉による京都大改造「京中屋敷替え」であると思われる。

したがって、本稿のはじめにみた金箔瓦の分布状況も、基本的には「京中屋敷替え」以後の状況と捉えられる。金箔瓦が集中して分布する範囲は「京中屋敷替え」によって出現した大名屋敷地区であり、聚楽第と内裏の間に大名屋敷が配置された城下町の構造を復原することができる。

筆者は、家紋瓦の分析から、天正19年(1591)の「京中屋敷替え」では大名屋敷の移転を含む城下町の再編成が行われた可能性を指摘したことがある<sup>(注24)</sup>。しかし、家紋瓦を含む新しい様相の瓦が出現するのは、新たに瓦葺きの建物が屋敷内に増築された場合や、瓦を葺き替えた場合なども考えられ、ただちに「京中屋敷替え」に結び付けるに根拠にはならなかった。しかし、組み合わせの判明する瓦がすべて新しい様相であることが明かになったことは筆者の指摘を考古学的に裏付ける一歩となるものとする。

(もりしま・やすお=当センター調査第2課調査第4係調査員)

- 注1 宇佐晋一 1950「京都市警庁舎敷地遺跡調査報告」(『古代学研究』第2号)
- 注2 長戸満男 1990「伏見城跡出土の金箔瓦」(「第35回京都市考古資料館文化財講座資料」)
- 注3 各地点で出土した金箔瓦を掲載した文献は、文献一覧に示している。
- 注4 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1988『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度
- 注5 西田直二郎 1919「聚楽第址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊 京都府
- 注6 森島康雄 1993「聚楽第跡出土の軒平瓦」『京都府埋蔵文化財情報』第49号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注7 大阪城天守閣 1993『特別展城下町大坂』p.16-12、黒田慶一 1994「豊臣氏大坂城の瓦について」『織豊城郭』創刊号 p.76 第11図-3625
- 注8 文献24 p.136
- 注9 (財)大阪市文化財協会 1992『難波宮址の研究』第九 図面107-3637
- 注10 田中幸夫 1990「播磨で活躍した室町・桃山時代の瓦工集団」『今里幾次先生古稀記念播磨考古学論叢』p.692 第11図-1
- 注11 注10田中論文p.691に指摘されている。
- 注12 中川信作 1976「難波宮跡発掘時出土の「金瓦」資料」『難波宮跡研究調査年報』1974難波宮址顕彰会 p.98 Fig.42-18・19、(財)大阪市文化財協会 1992『難波宮址の研究』第九 図面106-3620
- 注13 伏見城研究会 1975『伏見城豊後橋北詰の調査』p.13 第9図-1・2、(財)京都市埋蔵文化財研究所 1979『伏見城跡』p.7 第7図-1
- 注14 中村博司 1982「大坂城金箔瓦に関する基礎的考察」『大坂城の諸研究』日本城郭史研究叢書第8巻 p.195
- 注15 文献13-図版第20
- 注16 森島康雄 1994「聚楽第と城下町の瓦」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会
- 注17 文献25-p.74・75

注18 文献8 -p.281

注19 報告書では軒丸瓦とされているが、丸瓦部が短く、玉縁を持たないものがあり、棟込め瓦と考えられる。

注20 ここで桐文軒丸瓦・軒平瓦とされているものを桐文ではなく蔦文とする見解もある。(木戸雅寿 1995「織豊期城郭にみられる桐文瓦・菊文瓦について」『織豊城郭』第2号)

注21 文献8 -p.256

注22 注16に同じ。

注23 中井均 1995「滴水瓦に関する一考察」『織豊城郭』第2号 織豊期城郭研究会

注24 注16に同じ。

#### 出土金箔瓦記載文献

- 1 「京都市警庁舎敷地遺跡調査報告」『古代學研究』第2号 古代學研究会 1950
- 2 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部 京都大学文学部 1968
- 3 『平安京関係遺跡発掘調査概報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1975
- 4 「京都法務合同庁舎新営地に於ける埋蔵文化財発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報集』1976 鳥羽離宮跡調査研究所 1976
- 5 『聚楽第跡発掘調査報告』平安宮跡発掘調査団 1977
- 6 「平安宮主水司跡」『平安京跡発掘調査概報』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978
- 7 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980
- 8 「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』(1980-3) 京都府教育委員会 1980
- 9 『坂東善平収蔵品目録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980
- 10 「平安宮縫殿寮跡」『平安京跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財調査センター 1981
- 11 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981
- 12 「平安京左京北辺二坊発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第3冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982
- 13 「聚楽第址(補遺)」『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊(復刻版) 臨川書店 1983
- 14 『平安京土御門烏丸内裏跡』(財)古代學協會 1983
- 15 『平安京跡発掘資料選』(二) (財)京都市埋蔵文化財研究所 1986
- 16 「平安京左京北辺三坊五町発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第27冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988
- 17 『平安京左京三条四坊四町』(財)京都文化財団 1988
- 18 『桃山時代の京都』京都市考古資料館 1989
- 19 「平安京(左京近衛・西洞院辻)発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第33冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- 20 「第28回京都市考古資料館文化財講座資料」京都市考古資料館 1989
- 21 「第35回京都市考古資料館文化財講座資料」京都市考古資料館 1990

- 22 「平安京左京北辺二坊」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所  
1991
- 23 「平安京左京一条三坊二町・西洞院大路発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第45冊（財）京都  
府埋蔵文化財調査研究センター 1991
- 24 「平安京跡（聚楽第跡）発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第54冊（財）京都府埋蔵文化財調査  
研究センター 1993
- 25 「平安京跡・旧二条城跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第59冊（財）京都府埋蔵文化財  
調査研究センター 1994
- 26 「平安京跡左京一条二坊十四町（左獄・囚獄司）発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第63冊  
（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995
- 27 「平安京左京二条三坊」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所  
1995